クォータリーレポート

気仙沼・南三陸だより

第2号　平成24年9月
発行：気仙沼地方振興事務所

「第23回 歯の健康のつどい」開催
（気仙沼保健福祉事務所）

6月10日（日），気仙沼市民健康管理センター「すこやか」において「第23回歯の健康のつどい」を開催しました。

この催しは，「歯の衛生週間」事業の一環として，歯の衛生に関する正しい知識の普及啓発と，歯科疾患の予防に関する適切な習慣の定着を目的として，毎年気仙沼市及び気仙沼歯科医師会と共同で開催しているものです。昨年度は，東日本大震災の影響で中断したため，今回は2年ぶりの開催となりました。

イベントでは，「よい歯の標語コンクール」と「8020よい歯のコンクール」表彰式のほか，歯の健診・相談コーナーやブラッシングコーナー，簡単おやつクッキングなどを行いました。また，人形劇や親子エアロビクス，バルーンアートといった親子で楽しめる催しもありました。更に，今年はねんりんピックPRキャラクターの「むすび丸」と，気仙沼市観光キャラクター「ホヤぼーや」も応援に駆けつけてきてくれました。

（むすび丸とホヤぼーや）

当日は，多くの市民に来場いただき，歯の健康について効果的なPRができたのではないかと思います。

（表彰式の様子）

「地域リハビリテーション従事者基礎研修会」実施
（気仙沼保健福祉事務所）

7月6日（金），ふつうのくらし研究所の吉川和徳先生（理学療法士）を講師に，地域リハビリテーション従事者基礎研修会を実施しました。

今年度から，介護保険法で福祉用具の導入に際して「福祉用具サービス計画」の策定が義務づけられました。

そこで，昼の部では計画策定に関わるケアマネージャーと福祉用具専門相談員の方を対象に研修し，「障害とは？　生活機能とは？　自立とは？」という基本的なことを考え直し，ケアプラン作りやその実践で様々な職種が一緒に取り組むことの必要性を学びました。

（研修会の様子）

夜の部ではリハビリテーション専門職を対象に，『理学療法士・作業療法士としてのSeatingとは』というテーマで研修しました。

車いすで姿勢が崩れている場合，安易にタオルなどを詰めて体を整えようとしてしまうことがあります。しかし，専門職として「からだ」と椅子の適合を考えるためには，まず身体機能を評価し適切な姿勢を捉えた上で，それに合った車いすや姿勢のサポートを提供していくことが重要であると，実技を交えながら講義を受けました。

参加された皆さんは大変熱心に受講されていました。

（研修会の様子）

「薬物乱用防止ヤング街頭キャンペーン」開催
（気仙沼保健福祉事務所）

麻薬や覚せい剤等の薬物乱用問題は全世界的な広がりを見せ，人類が抱える最も深刻な社会問題の一つとなっています。最近では，「合法ハーブ」などと称して流通している「違法ドラッグ」の乱用が急速に拡大し，憂慮すべき状況です。

そのため，「新国連薬物乱用根絶宣言」の支援の一環として，6月20日（水）から7月19日（木）まで全国で官民挙げて薬物乱用防止「ダメ。ゼッタイ。」普及運動が展開されました。

当所でも，7月20日（金）にイオン気仙沼店において，気仙沼向洋高等学校の生徒さんに御協力いただき，気仙沼地区薬物乱用防止指導員，気仙沼警察署員等と一緒に，「薬物乱用防止ヤング街頭キャンペーン」を開催しました。来店された皆様に，薬物乱用防止啓発品を配布しながら，薬物乱用防止の重要性を訴え，また，活動支援のための募金を呼びかけたところ，8千円を超す善意が寄せられました。

今後も，薬物乱用のない，明るく健康的で住みよい地域づくりのために，啓発活動を一層推進していきますので，県民の皆様の御理解と御協力をお願いします。

（キャンペーンの様子）

「第１回米づくり推進気仙沼地方本部会議」開催
（気仙沼地方振興事務所農林振興部）

宮城県米づくり推進気仙沼地方本部主催による「第１回米づくり推進気仙沼地方本部会議」が開催（７月１２日）されました。

本部の目標を①高品質・良食味米の安定生産，②省力・低コスト稲作の推進，③こだわりを持った多様な米づくり，④宮城県産米の評価向上及び消費拡大，の４項目として，その達成に向けた活動を行っています。

本会議では，県全体および気仙沼・南三陸地域の現在の水稲生育状況や今後の管理を中心に，東日本大震災による農地災害の復旧状況や放射性物質に関する事など幅広い情報交換，協議がなされました。また，当日は省力・低コスト化が期待できる水稲鉄コーティング直播栽培技術実証ほにおいて，現地検討会も開催しました。

（本会議の様子）

品質・収量ともに優れる実りの秋を迎えられるよう，気仙沼・南三陸地域の米づくりを関係機関一丸となって取り組んでいきます。

（鉄コーティング直播栽培現地検討会）

「宮城大学との連携による グリーン・ツーリズムの推進」
（気仙沼地方振興事務所農林振興部）

気仙沼地域におけるグリーン・ツーリズムを推進するため，宮城大学事業構想学部の風見正三教授と風見研究室のゼミ生による現地視察及び意見交換会が７月１０日に開催されました。

現地視察では，「RQ 唐桑 海の体験センター」，「かき小屋 唐桑番屋」，「八瀬・森の学校」の３か所を訪問。震災後の気仙沼・唐桑地域の現状や地域資源を見るとともに，東日本大震災から現在までの復興状況，災害ボランティアから受けた支援，震災以降の気仙沼・唐桑地域への訪問者の状況などの話を聞くことができました。

（かき小屋 唐桑番屋にて，畠山代表(右奥)より震災当初から現在までの状況を聞いている様子）

その後に行われた意見交換会では，風見教授より，「気仙沼・唐桑の良さを地域ブランドとして確立し，気仙沼・唐桑に来ていただいた方に，地域のファンとなってもらい，長期的な滞在をする方が出てくることを長期的な目標にグリーン・ツーリズムを推進していくべき」等の意見をいただきました。

（八瀬･森の学校での意見交換会の様子）

「園芸振興総合戦略セミナー」の開催
（気仙沼地方振興事務所農林振興部）

７月２６日(木)に気仙沼市の本吉公民館で園芸振興総合戦略セミナーを開催しました。

今回のセミナーは、「地域農業の活性化と再生に向けて植物工場の現状と可能性を探る」と言うテーマのもと、(株)三菱総合研究所地域経営研究本部長の伊藤保主任研究員と(株)グランパの阿部隆昭社長の２名を講師としてお招きし、講演をいただきました。

(株)三菱総研の伊藤主任研究員は、同社が立ち上げた植物工場研究会のプロジェクトリーダーも務めており「植物工場の現状と地域活性化への貢献・展望」と題して、植物工場の現状と未来について主に経営的側面からお話しをしていただきました。

(株)グランパの阿部社長には、「地域に根ざした植物工場の運営と陸前高田市での取り組み」と題して、同社が陸前高田市で新たに始めた取り組みと同社の植物工場について、具体的なお話しをしていただきました。

植物工場は震災後、被災農地の活用や雇用確保対策などから注目されています。参加者からも多くの質問がなされ、植物工場について理解の深まる有意義なセミナーとなりました。

（伊藤氏の講演）

「豊かな森を育む森林フォーラム」開催
（気仙沼地方振興事務所農林振興部）

７月８日（日）に気仙沼ゲストハウスアーバンにおいて気仙沼市主催による「豊かな森を育む森林フォーラム」が開催されました。

このフォーラムは，気仙沼市内で木質バイオマス利用施設の整備が計画されていることから，市民の林業への関心を高めるため，総務省の「緑の分権改革調査事業」を活用して開催したものです。

フォーラムでは，菅原茂気仙沼市長，佐藤好昭県林業振興課長が挨拶した後，中嶋健造氏（ＮＰＯ法人土佐の森・救援隊事務局長）が「だれもが林業男子・林業女子になれる副業型自伐林家のすすめ」と題して基調講演を行い，森林所有者が自分で伐採した間伐材を木質バイオマス利用施設等に供給することで，森林の整備を進め地域を元気にすることができると訴えました。

（中嶋氏による基調講演）

基調講演の後，中嶋健造氏・熊谷博之氏（森を育み米を作るフォレストクマガイ）・畠山信氏（ＮＰＯ法人森は海の恋人副理事長）・高橋正樹氏（気仙沼地域エネルギー開発株式会社代表取締役社長）・小野寺俊勝氏（気仙沼市産業部農林課長）によるパネルディスカッションが行われ，「林業と漁業の連携により気仙沼独自のブランドを創出することができる。」「木質バイオマスの活用により循環型社会の実現を目指すべきだ。」等の意見が出されました。

会場の約５０名の参加者からは，「自分もぜひやってみたい。」「市有部分林の活用を検討して欲しい。」等の声が上がり，大変有意義なフォーラムとなりました。

気仙沼市では，今後，間伐や材の搬出等に取り組みたい市民を対象に講習会を開催することにしています。

（意見を交わすパネリスト）

「ANAこころの森」が南三陸町に誕生
（気仙沼地方振興事務所農林振興部）

７月２６日（木），南三陸町役場において全日本空輸株式会社（以下ＡＮＡ）と入谷生産森林組合による森林使用協定書の調印式が行われました。

ＡＮＡでは，２００４年から就航国内空港周辺において緑化育林活動に取り組み，また，東日本大震災後には「ＡＮＡこころの湯プロジェクト」として避難所で給湯活動などの支援活動を行ってきました。

このような活動を更に発展させるため，「みやぎの里山林協働再生支援事業」を活用して入谷生産森林組合から１０．６ヘクタールの森林を２年間借り受け，「ＡＮＡこころの森」として社員ボランティアも参加しながら間伐などの手入れを行うことにしたものです。

また，間伐で出る材は，フロンティアジャパン株式会社南三陸工場でノベルティグッズや積み木等に加工し，積み木は南三陸町内の新生児に贈呈することにしています。

調印式では，ＡＮＡの篠辺修副社長と入谷生産森林組合の山内範一組合長に加え，立会人として南三陸町の遠藤健治副町長が出席し，協定書に調印した後，堅い握手を交わしました。

（調印後握手を交わすANA篠辺副社長（中央），入谷生産森林組合山内組合長（右），南三陸町遠藤副町長（左））

調印式終了後は，関係者全員で「ＡＮＡこころの森」に移動し，南三陸町とＡＮＡの絆が更に深まることを期待しながら森の状況を視察しました。

（「ANAこころの森」で記念写真の撮影）

南三陸町復興組合「華」の施設竣工披露式が開催されました

（本吉農業改良普及センター）

南三陸町復興組合「華」は，東日本大震災の津波により被災した若手輪ぎく生産者４名によって結成されました。組合は，早期に営農再開したいとの想いが強く，JA が事業主体となった平成 23 年度東日本大震災農業生産対策交付金によるリース事業を活用して，低コスト耐候性ハウスや農業機械類等を導入しました。平成 24 年 4 月から露地栽培で輪ぎく生産を開始しましたが，このたび施設の工事が完了し，施設竣工披露式が開催されました。

披露式では，佐藤仁町長を始め，関係機関からの祝辞があり，復興組合「華」が南三陸町の営農再開モデルとなるように，今後も地域農業の牽引役として活躍してほしいと激励の言葉がありました。

また，佐藤隆雄復興組合長から，「被災直後はどうしていいか分からなかったが，震災の混乱が落ち着くにつれ，やはり輪ぎくを栽培したいとの想いが強くなった。色々な方から支援をいただいて感謝の気持ちでいっぱい。自分たちは良いきくを作ることが恩返しだと思っている。」とあいさつがありました。他の組合員からは，「今後も地域農業の担い手としてがんばっていく。」「きくを作れることがうれしい。みんなに感謝しながら栽培したい。」など，今後の抱負や感謝の言葉がありました。

普及センターでは，震災以来「華」の組織づくりや農地復旧後の栽培指導を行ってきました。今後も「華」のきくが南三陸町の農業復興のシンボルとなるよう継続して支援していきます。

（佐藤組合長の挨拶）

第2回農産加工講座を開催しました

（本吉農業改良普及センター）

７月 25 日，南三陸町の入谷公民館において第２回農産加工講座を開催し，農産加工に関心のある方など 13 名が参加しました。

講師に（株）パイロットフィッシュの商品開発コーディネーター五日市氏を迎え，「小さな力の商品開発」というタイトルで，農産加工品の商品づくりについて講義をしていただきました。身近な素材の魅力に気づき，それをターゲットに訴えかける戦略など，事例を交えた講義に，参加者は身を乗り出して聞き入っていました。

講義の後，2 班に分かれ，地域食材・食文化の

見直し意見交換会を行いました。参加者から多数の食材が挙げられ，五日市氏から「南三陸ならではの豊富な海の幸・山の幸。それを一工夫すればすてきな加工品が生まれるはず」と激励をいただきました。

五日市氏を講師とした農産加工講座は3回シリーズとし，次回は参加者に商品や試作品を持参してもらい，それに対して商品化へのアドバイスをいただく形で開催する予定です。今回の参加者から，「次回も必ず来ます」「自信作を持ってきます」といった加工品の商品づくりに意欲的な意見が聞かれました。

普及センターでは，今後も農産加工講座を開催し，アグリビジネスや女性農業者の起業活動を支援していきます。

（熱心に受講する参加者たち）

えだまめ先進地視察研修を実施しました
（本吉農業改良普及センター）

７月２３日，階上大谷地区におけるプロジェクト課題推進の一環として，えだまめ視察研修を実施し，対象農家，ＪＡ，普及センターあわせて５名で登米市米山町西野地区を訪問しました。

当日は好天にも恵まれ，収穫間際のえだまめを前に視察先の農家の方から，肥培管理の特徴，収穫のタイミング，収穫後の調製方法について聞くことができました。

参加農家は，説明者の話を聞いて熱心に質問し，自分のえだまめの肥培管理との差や出荷方法の違いについて理解を深めていました。

普及センターは，今後も被災者の営農再開を支援するとともに，栽培技術の普及・定着に向け活動していきます。

（研修の様子）

がんばる養殖の取組について
（気仙沼地方振興事務所水産漁港部）

養殖業の早期再開を図るため、漁業者グループによるがんばる養殖の取り組みを進めています。

この取り組みは、国の「がんばる養殖復興支援事業」を活用し、漁協等が被災地の養殖業の早期再開と生産量の回復を共同化で進めます。地域で作成した復興計画に基づき、生産が安定するまでの間、生産費用や養殖資材代などの必要経費の支援を受けて，漁業者が養殖業に従事するものです。取組期間は３事業年度（３漁期）となり養殖期間が短いワカメやギンザケは３年間、養殖期間が長いカキやホタテガイは４～５年間になります。

現在は、志津川湾の３グループ 172 経営体がギンザケやワカメ、カキ、ホタテガイ養殖で取り組んでおり、慣れない共同作業の中においてもこれまでの経験を生かし養殖作業を行っています。この８月初旬に１事業年度の水揚げが終了したギンザケ養殖では、震災前よりギンザケ価格の落ち込みがありましたが、この取り組みによって落ち込み分に対する補てんがされることになっています。

今後も気仙沼湾と志津川湾の５グループ（約 70 経営体）が取り組みすることを決めているので、復興計画の策定に当たって当部としても支援をしているところです。

この取り組みが、気仙沼・南三陸地域の養殖業の復興の牽引役となることを期待しています。

（志津川湾のギンザケ養殖の給餌風景）

宮城産直市
（気仙沼地方振興事務所地方振興部）

７月１２日(木)から７月１４日(土)，「宮城産直市」が東京都内の上野駅グランドコンコースにて開かれました。

「宮城産直市」では，震災後復興に向けて頑張っている宮城県の野菜などの食材やスイーツや日本酒などの加工品などを販売したほか，地域の魅力を紹介する観光ＰＲブースやイベントブースなども設けました。気仙沼・南三陸地域内では，気仙沼特産のフカヒレを使用したスープやラーメン，南三陸町で加工された海苔などの商品が販売されていました。

イベントブースでは，「伊達武将隊」の演武が行われたほか，１２日（木）と１３日（金）には，三陸地域観光キャラクターとして気仙沼市の「ホヤぼーや」，東松島市の「イートくん」が参加し，「三陸地域部会クイズ大会」も開かれました。出題したクイズの正解者には，景品として三陸地域の特産品が景品として贈られました。

（クイズ大会の様子）

「宮城産直市」には大勢の人が集まり，宮城県産の食材を買い求めていました。今後も，宮城県の食材のＰＲだけではなく，来年度の仙台・宮城デスティネーションキャンペーンに向けて宮城県の観光ＰＲにも力を入れていきます。

（産直市の様子）

「小田の浜海水浴場海開き」
（気仙沼地方振興事務所地方振興部）

気仙沼市の離島，大島の「小田の浜海水浴場」は，環境省の「快水浴場百選」の特選（全国第２位）として認定された美しい海水浴場です。

海開きの前日には，気仙沼大島観光協会主催の小田の浜海水浴場清掃が開かれ，気仙沼地方振興事務所の職員も参加し，翌日の海開きへの最終準備を行いました。

（清掃の様子）

東日本大震災により大きな被害を受けましたが，地元の方々だけではなく，全国から駆けつけたボランティアの皆様のご支援もあり，今年県内の海水浴場で唯一の海開きが開かれました。

安全面を考慮して，高台に近い北側の３分の１の範囲で営業が始まりました。仮設トイレとシワーが設置され，８月１９日まで海水浴場は開設され，多くの海水浴客が訪れました。

（海開きの様子）

【あとがき】

震災から１年半が経過しようとしております。

先日、港町の夏を彩る「気仙沼みなとまつり」が２年ぶりに復活、鎮魂と復興の願いが込められた祭りは大いに盛り上がりました。

お盆が終わると、いよいよ秋の盛漁期、脂ののった戻りガツオやサンマなどが次々と水揚げされます。今年は漁港の復旧工事が本格化しているため、水揚げなどに使う岸壁が不足しておりますが、何とか調整して１隻でも多くの漁船に水揚げしてほしいものです。

水揚げされた魚は、市の内外に送り出されるとともに、水産加工や運送、製氷、梱包資材、さらには漁船のメンテナンス等々、様々な分野を潤し活気づけます。

まさに気仙沼は、水産業を核とする水産都市であり、復興に当たっては、漁港や魚市場はもとより、水産加工施設など漁港背後地も含め一体的に整備していくことが重要です。

今年は復興元年，水産業をはじめ様々な分野の事業が本格的にスタートしました。現在全国からの多くの職員の方々に応援をいただいております。１日も早い復興に向けて一丸となって頑張っていきましょう！（K）